

岩波ジュニア新書 76

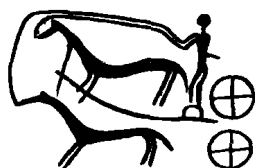
古文の読みかた

藤井貞和著



古文の読みかた

藤井貞和 著



岩波ジュニア新書 76

古文の読みかた

岩波ジュニア新書 76

1984年5月21日 第1刷発行 ©

1984年7月25日 第2刷発行

定価 580 円

著 者 ^{よじ}藤 ^い井 ^{さだ}貞 ^{かず}和

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

はじめに

古文をどう学んだらよくわかるようになるのか、その方法を知りたいという声をしばしば耳にします。本書は、古文がわかるようになりたいという、皆さんの率直な訴えを受けとめて書かれています。古文を学びはじめた人のぶつかるにちがいない、疑問点や学習上のポイントを丁寧に解説し、古文を読みますすめてゆくすじみちを十分にさししめし、古文とは何か一通り理解できるようになるまでお伴をすることが本書の目的です。

四ページか六ページごとに節を分けて、読みやすくする工夫をしました。途中のページから読んでも、また任意のページをひらいて読んでも学習できるようになっています。

例文は平安時代の散文の作品(文学作品が主)から多く引用しました。平安時代の散文を繰り返かえして学ぶことが基礎的な力を培うことになるのです。したがって和歌についての説明は、最少にとどめました。でも上代(奈良時代以前)の文献や、中世・近世の作品にも、必要なかぎりであられるようにしてあります。

一つだけ用意してほしいものは、専用の、ハンディな古語辞典です。一人一冊ずつ持つ

てほしいのです。辞典は学習するために引くので、おぼえるために引くのではないのですから、気軽にどんどん利用すべきで、学習の捷徑（しょうけい）（早道）ここにあり、です。

全体を三章に分けました。Ⅰ章は、古文をどのように読んだらいいかについて、さまざまな古文の特徴を取りあげながら解説してあります。これによって大づかみに、古文とはどのようなものであるかがわかるしくみです。Ⅱ章は、Ⅰ章で取りあげた古文の特徴を、さらに奥まで分け入って考察するとともに、一通り古文の文法上の理解がゆきとどくように、基礎的に学ばなければならぬことのすべてを取りあげて配列しています。Ⅲ章は、いわば応用編です。興味深い内容の古文を厳選して、さらに〔問一〕〔問二〕というように問題を立ててみました。あくまで学習上の手がかりとしての設問形式です。なお昭和五十九年度の共通一次試験の問題をかかげてあります。

さらに、Ⅰ―Ⅲ章で言いのこしているやや程度の高いことや注意すべきこと、例文についての注記や現代語訳（本文に＊のついている箇所）を、巻末に、付編として、一括してあります。また、さくいんがついているので、大いに利用してください。

本書の成るに際して、編集部の島崎道子さんに御礼申しあげます。

一九八四年 春

著 者

目

次



はじめに

I 古文を解く鍵^{かぎ}

- 1 古文はどのように書かれているか……………二
- 2 主語の省略……………ハ
- 3 話し言葉としての敬語……………一四
- 4 最高敬語から悪態^{あくたい}まで……………二〇
- 5 丁寧^{ていねい}の表現について……………二六
- 6 係り結び^{かかりむす}とは何だ……………三
- 7 係り結びが流れるとき……………三六
- 8 助動詞のはなし——時に関する助動詞を中心に……………四四
- 9 人は推量によって生きる——推量の助動詞……………五〇
- 10 助動詞の役割……………五六

II 古文の基礎知識

- 11 受身について——る・らる(1)……………六
- 12 “できない”ことの表現——る・らる(2)……………六
- 13 使役と尊敬——す・さす・しむ(1)……………三
- 14 助動詞による尊敬表現——す・さす・しむ(2)、る・らる(3)……………六

III 古文を読む

31 説話文	一三	23 断定の助動詞「なり」と	二三
		「たり」	二三
		比喩をめぐって——ごとし・やうなり	二六
		格助詞とは——「に」を中心に	二〇
		接続助詞とその周辺	二四
		副助詞いろいろ	一三
		係助詞とその周辺(1)——ぞ・こそ・なむ	一六
		係助詞とその周辺(2)——や・か・は・も	一四〇
		終助詞、間投助詞、並立助詞	一四四
		推量の「めり」と伝聞の「なり」	一四
		推量の「べし」	一四
		推量の助動詞「らし」と	一〇
		と仮想(まし)	一〇
		仮定(ば・とも・ども・その他)	一〇
		希望の表現——まほし・たし	一〇
		「ず」など	一〇
		「打消」の方法——助動詞	一〇
		敬語の実際——二方面敬語	一〇
		謙譲表現のまとめ	一〇
		尊敬表現のまとめ	一〇

33	寓話 うわ	………	一〇
34	物語文(1)	………	一四
35	物語文(2)	………	一六
36	日記文(1)	………	一七
37	日記文(2)	………	一八
38	万葉集	………	一八
39	軍記物	………	一八
40	批評文	………	一八
41	徒然草(試験問題から)	………	一九
42	古文学習と現代語訳	………	二〇
付編			二〇
さくいん			二〇

カット 飯山 勇

I

古文を解く鍵



1 古文はどのように書かれて
いるか

古文が、わかりにくいなあ、と感じられるとしたら、それは第一に、古文のなかには、語句の一部を省略することがあるからではないか、と思います。

現代文でも、

「きみ、行く？」

「わたし、それ、知らないわ。」

と、簡略な言いかたをすることがよくあり、それと同じことなのですが、古文のなかで簡略な言いまわしをされると、われわれにはすぐに文の意味をとることができなくて、困ったりするのです。

「きみは、行くのか？」

「わたしは、それを、知らないわ。」

といえ、はっきりした言いかたです。それを簡略な言いかたにすると、それだけ親しみのこもった、くだけた表現になります。古文も同じです。古文は親しみをこめて、読者に語りかけるようにして書かれています。それがときに語句の一部を省略したりする原因に

1 古文はどのように書かれているか

なります。

簡単な語句の省略の問題からはいってゆくのですが、そのまえに、古文の表記のことに、ちょっとだけ、ふれておきましょう。古文の生きた実例を味わいながら学習してほしいので、やや長めのようなのですが、例文をかかげることにします。

『土佐日記』の一節です。これを読んでみましょう。

あるひと、あがたのよとせいつとせはてて、れいのことどもみなしをへて、げゆなどとりて、すむたちよりいでて、ふねにのるべきところへわたる。かれこれ、しるしらぬ、おくりす。

（『土佐日記』発端）

ひらがなばかりで書かれていて、読みとるのが面倒めんどうですか。この『土佐日記』は、きわめて珍しいことなのですが、これを書いた紀貫之きのつらゆきという人が、どんな字を使って書いたか、どのような仮名遣いかなづかいを用いたかということまでほぼわかっていて、それによるとほとんどが仮名書きから成っている右のような表記でした。（もともと、古文の書かれた時代には、ひらがな表記の場合、濁点だくてんも句読点くとうてんもありませんでした。だから右の例文から濁点と句読点とを取りのぞくと、紀貫之の書いた原文にもっと近づきます。試してごらんなさい。*）

仮名遣いは歴史仮名遣いです。古文は歴史仮名遣いで表記されます。

ひらがなばかりで書かれると、小学校一年生の書いた文章のようではありませんか。そのとおり、ひらがなが使われるようになって、まだ五十年ほどしかたっていないころの文章なのです*。ひらがなが使われる一千年の歴史からみると、まだできたての、ちょうど人の一生でいうと文字を習いはじめた小学校一年生に相当します。われわれのこれから学ぶ古文は、小学校の児童がうんうんうなって一所懸命書くように、苦心して、精いっぱい書いたものばかりです。ぜひ、いたわって、いくしむように読んでやりたいと思います。ひらがなばかりではよく読めないや、という読者のために、教科書に出てくるような表記で左に書きだしてみます。

ある人、あがたよとせいつとせ県の四年五年果てて、例のことども皆し終へて、げゆ解由など取りて、たち住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。

漢字をあてると、もう小学校高学年ぐらいの文になりました。これから学ぶ古文の表記はだいたいこのような程度のものです。知っている漢字ばかりが使われています。さて、この古文は、現代文とどういうところがちがっているのでしょうか。直訳を施してみましようか。

ある人が、地方勤務の四年五年が終わって、例のことどもを皆し終えて、げゆじよう解由状など

1 古文はどのように書かれているか

を取って、住んでいる官舎から出て、船に乗るべき所へ渡る。あの人この人、知っている人知っていない人が、送りをする。

現代文に移しかえるだけ、という、文字どおりの直訳を試みたところ、日本語ですからびつたり重^{かさ}なると思ったのに、どうしてもはみ出すところが現代文に出てきました。

ある人が、地方勤務の四年五年が終わって、例のことどもを皆し終えて、解由状などを取って、住んでいる官舎から出て、船に乗るべき所へ渡る。あの人この人、知る人知らない人が、送りをする。

右のゴシック体(太字体)のところが、現代文にするさいに補った箇所です。試みにこれらを取りのぞいて読むと、つぎのようになります。

ある人、地方勤務の四年五年終わって、例のことども皆し終えて、解由状など取って、住む官舎から出て、船に乗るべき所へ渡る。あの人この人、知る知らない、送りする。右の現代文の意味はたしかに通じます。しかし文章としては、くだけた、どちらかという^うと幼い感じの言いまわしになっています。これと似たような感じの言いまわしは、われわれ現代人の身の回りにもあるのではないでしょうか。最初に述べた、「きみ、行く?」「わたし、それ、知らないわ」というのがそれです。談話のなかにはよくある言いまわし

なのです。親しいもの同士の会話は、たいてい、こんな省略の文体でしゃべっていて、けっして不自由を感じることはありません。

古文には、会話文もあれば、地の文もあります。会話文が談話の文体で書かれていても、不思議はありません。しかし右に挙げてきた『土佐日記』の引用部分は、会話文でなく、明らかに地の文です。地の文であるのに、談話の文体にきわめて近いものになっている。

ここがとてもたいせつなところなのでよく記憶してほしい出発点ですが、古文は会話などの、談話の部分はもちろんのこと、地の文もまた、話すように、話し言葉の口調ですなおに書きあらわされていることが多いのです。

これが古文の書かれかたの第一に重要な点です。

この古文が話し言葉のように書かれているということは、これからおはなしする主語の省略や、敬語の問題にかかわってゆきます。

『土佐日記』の例文のような、平安時代の散文をどのように現代語訳したらいいかというのですが、とにかく古文を理解しようとすれば、現代語訳というものはきわめてたいせつなものです。あまりにたどたどしい直訳は読みにくいし、古文を理解したことにもならないでしょう。現代語訳は、省略されていた古文のなかの語句やことがらを適当に補っ

1 古文はどのように書かれているか

て、意味や内容がすらすらとわかるようにするものです。

『土佐日記』の引用部分を、直訳よりももう少しふくりました現代語に直しておくことにしましょう。

ある人が、地方勤務の四年か、五年の任期が終わって、おきまりの事務をすべてし終えて、解由^{げゆ}状^{じょう}などを受け取って、住んでいる官舎から出て、船に乗るはずになっている所へ渡る。あの人この人、知る人知らない人みんなが見送りをする。

現代語訳は正確であることが優先されるので、なかなかすらすら行かないことも多いと思いますが、皆さんも現代語訳を試みるようにしてください。なお現代語訳のことを口語訳ともいいます。



2 主語の省略

古文を勉強していると出会うことですが、書いているはずの主語がよくわからなくなって、意味がとれなくなる、ということがあります。だれが、とか、何が、とかいうことを指示してくれる主語がわからなくなったら、大あわてです。そんな古文は投げだしたくなります。

よく探すと主語が書かれている場合もあるけれども、多く、古文がよくわからなくなるのは、主語が書かれていないからです。

主語が省略されるといっても、ある動作や状態の主体が存在しない、ということは決してありません。「書きたまふ」という一文があると、だれが、という動作主（書くという動作の主体のことです）は、主語つまり表現された語句としてはあらわれていないけれども、「書きたまふ」という表現の背後に、ちゃんと存在しています。こういうのを主語が省略されている、といいます。

主語が省略されている場合には、簡単なケースと、複雑なケースと、二種類あります。二種類しかありません。

三河^{みかは}の国、八橋^{やっはし}といふ所に至りぬ^{*}。

〔伊勢物語〕九段